



~デイスイカノジョ~

泥酔彼女

泥酔した巨乳女子大生を犯しつくす



今日は僕が大学で所属するサークルの飲み会に来ていた
大勢で卓を囲むのはあまり好きではないし
人付き合いも得意ではない僕だが
今回は思い切って参加してみようと思った



今日は僕が大学で所属するサークルの飲み会に来ていた
大勢で卓を囲むのはあまり好きではないし
人付き合いも得意ではない僕だが
今回は思い切って参加してみようと思った

それは彼女がいたからだ

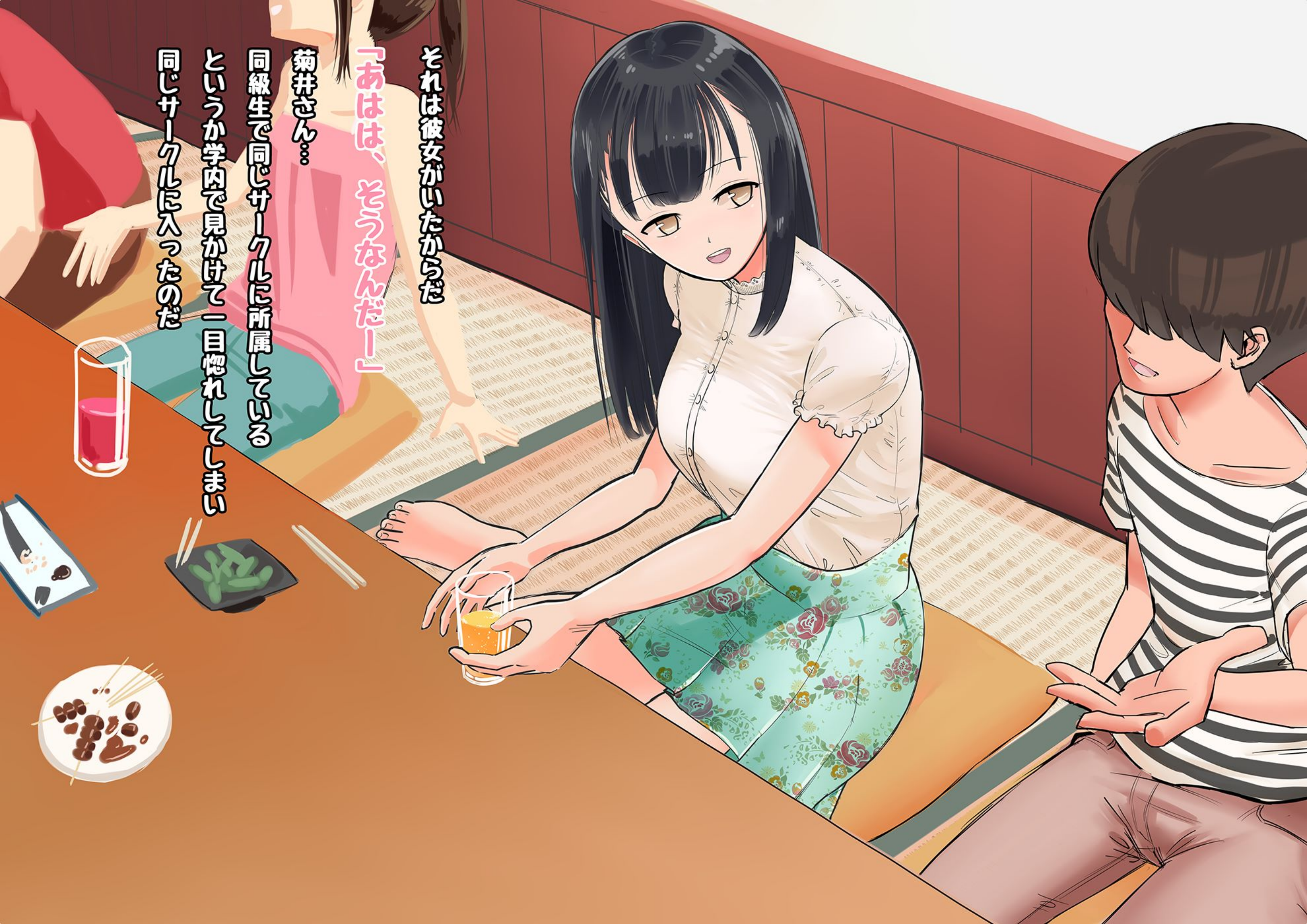
「あはは、そうなんだー」

菊井さん…

同級生で同じサークルに所属している

というか学内で見かけて一目惚れしてしまっ

同じサークルに入ったのだ



彼女の容姿はとても綺麗で

人当たりもよくサークル内での評判もすごいぶる良い

親や友達からも常に大切にされて

まっすぐに育ったのだらうことは容易に想像がつく

菊井さんはうまく喋れない僕の話にもしっかりと耳を傾け
楽しそうに会話をしてくれる



その容姿から、当然男子からの人気も高い
顔が整っていることに加え、とてもスタイルがいい
というか胸がとて大きい
この巨乳を目の前にして視線が持って行かない男はいないだろう

菊井さんの話によるとよくナンパもされるらしいが
今はあまりそういったことに興味はなく、すべて断っているそうだ

僕自身も菊井さんに男性としては見られていないのだろう
でも今は、菊井さんとうとうして楽しく話せているだけで幸せだ

「今日はいつてもは飲まないお酒も飲んでみようかな〜」

そういえば菊井さんは結構お酒を飲む方なのだろうか
なかなか早いペースでさっきからお酒を飲んでいるが…
顔を少し注意深く見てみるとかなり顔が赤くなっていた

「ぎ、菊井さん…って…お酒はよく飲むの？」

「ん〜…普段はそんなに飲まないけど

今日はちょっと飲んでみたい気分なの〜」

「そ…そうなんだ…」

菊井さん、結構酔ってきてるな…大丈夫かな…





〜
数十分後
〜

「んっっ……んっっ……」

「菊井さん……?」

まずは、PC全を消滅してしまっただけで、
まだ宴会も中絶だった界隈だが、いつか
幹事になってタマゴを呼んでもらおうか
とか、みんなだっけ、がっがっがっ
それそれの全話で中絶なのっ



oooooooooooo

「E!」

僕の心で「E!」の考えが浮かんでしまった

彼女の異変に気付いてくるのはJJJで僕だけ...

今彼女を連れ出せば...

ミソクダ...ミソクダ...

うや...でも...

.....ミソクダ...ミソクダ...ミソクダ...ミソクダ...

ミソクダ ミソクダ ミソクダ



「...菊井さん大丈夫？」

そう僕は小声で囁いた

「んっ……すっ……」

「……」

僕はあたりを見渡す

周りの皆はそれぞれのグループで各話を集中して話をやるなら今じかなら

「タクマズー呼びからね、菊井おと」

おつらら僕は彼女を抱き部屋からいっせいで田んぼにた





ミサド

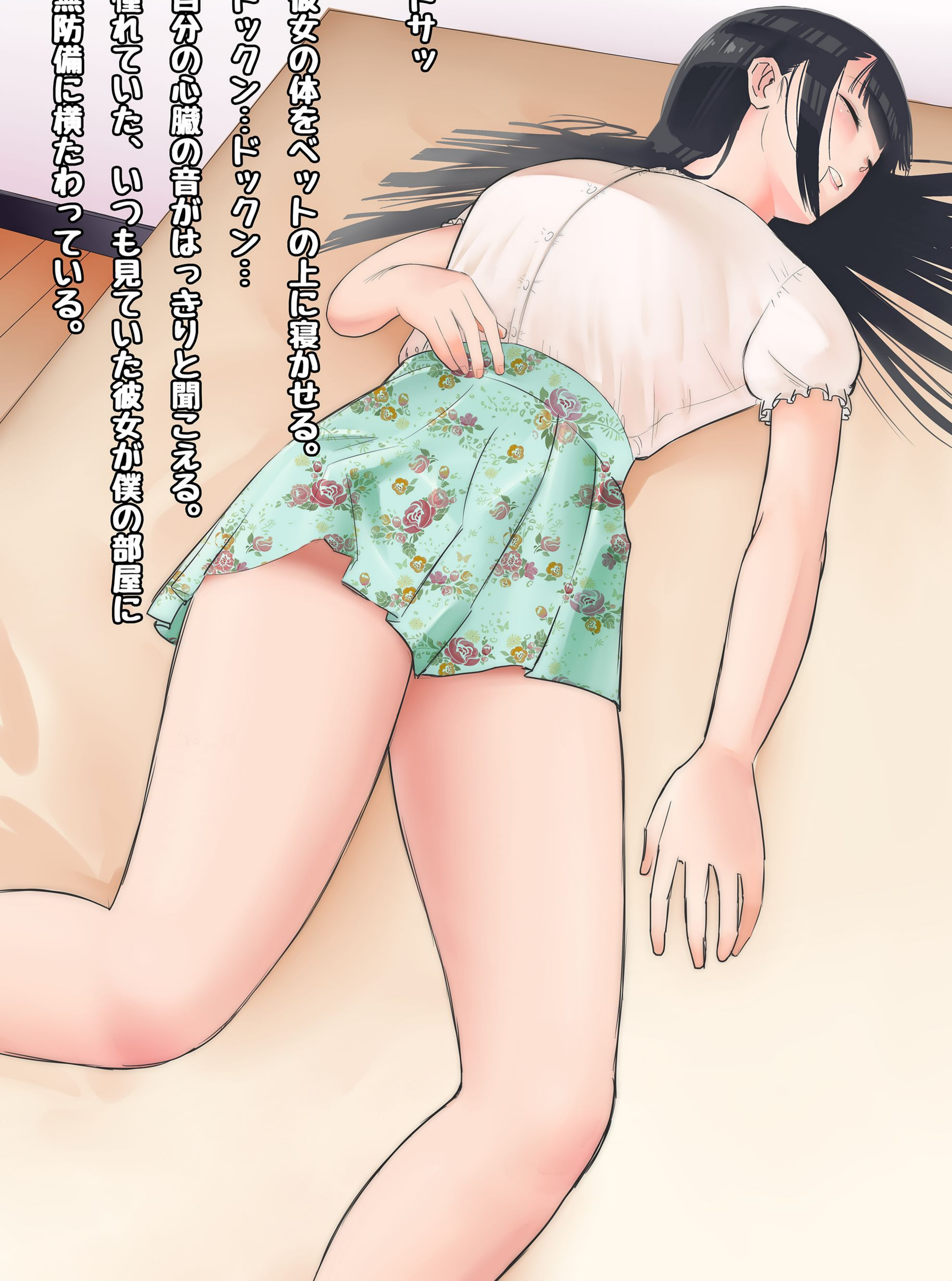
彼女の体をズットの上で寝させる。

ズツクン...ズツクン...

自分の心臓の音がはっきりと聞こえる。

憧れていた、いつも見ていた彼女が僕の部屋に

無防備に横たわっている。



「はあ… はあ…」

彼女の体を顔から舐めるように視姦する

少し赤みを帯び、透き通った肌

綺麗でツヤのあるすらりとした黒髪

服を持ち上げる大きな胸

スカートから無防備に晒される張りのある尻をそのまま





彼女の顔に自分の顔を近づける

ラベンダーのような香りが鼻にかけり、より僕を興奮させる

閉じた瞼から伸びるまつ毛、

すらりとした筋の通った鼻、つやを帯びた唇

そのすべてが今、自分の好きでいい...

僕は今までの人生で経験したことのないほど興奮していた

彼女の唇を奪いたい

そつ頭で考えたとき、僕の体はもう動いていた。

くちゅっ

唇が重なり、僕の唇に

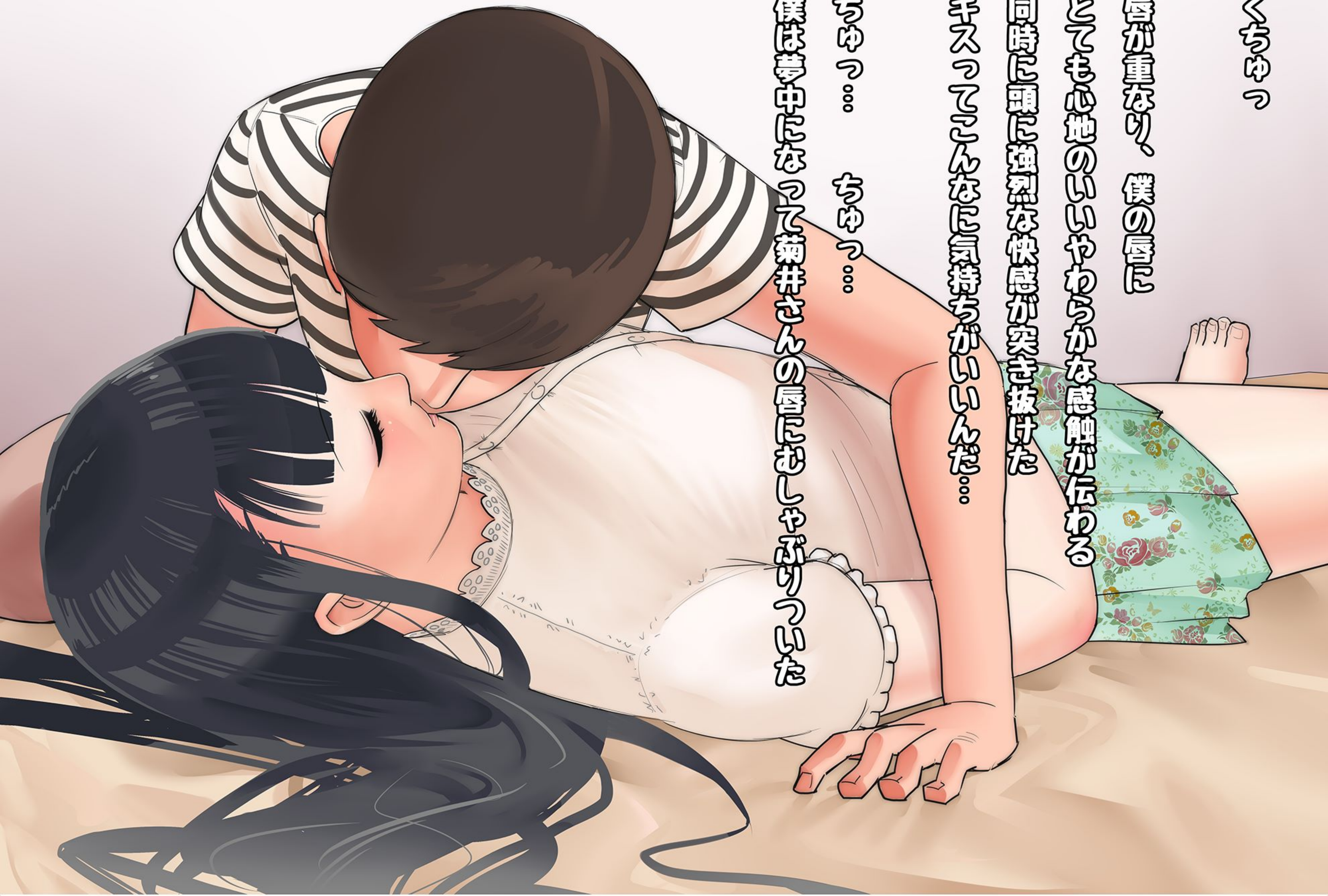
とても心地のいいやわらかな感触が伝わる

同時に頭に強烈な快感が突き抜けた

キスってこんなに気持ちがいいんだ…

ちゅっ…… ちゅっ……

僕は夢中になって菊井さんの唇にむしゃぶりついていた



ぺちゅっ…ちゅっ…

唇を舐めまわし、彼女の口の中に舌を潜り込ませる

無防備に開いた口は

僕の侵入を拒むことも無く歓迎することも無かった



彼女の唇をひとしきり味わった僕は
胸へと視線がのびていった

「すうー！…」

んんっ…」

彼女の呼吸に合わせて上下する、はち切れんばかりの胸

普段はじっくりと見ることはできないが

今だけは好きにだけ見ていられる

そして、触れることも…

ふわっ

手ではかすがな温かおと柔らかなおまの温い
ただ、これでは満足できな

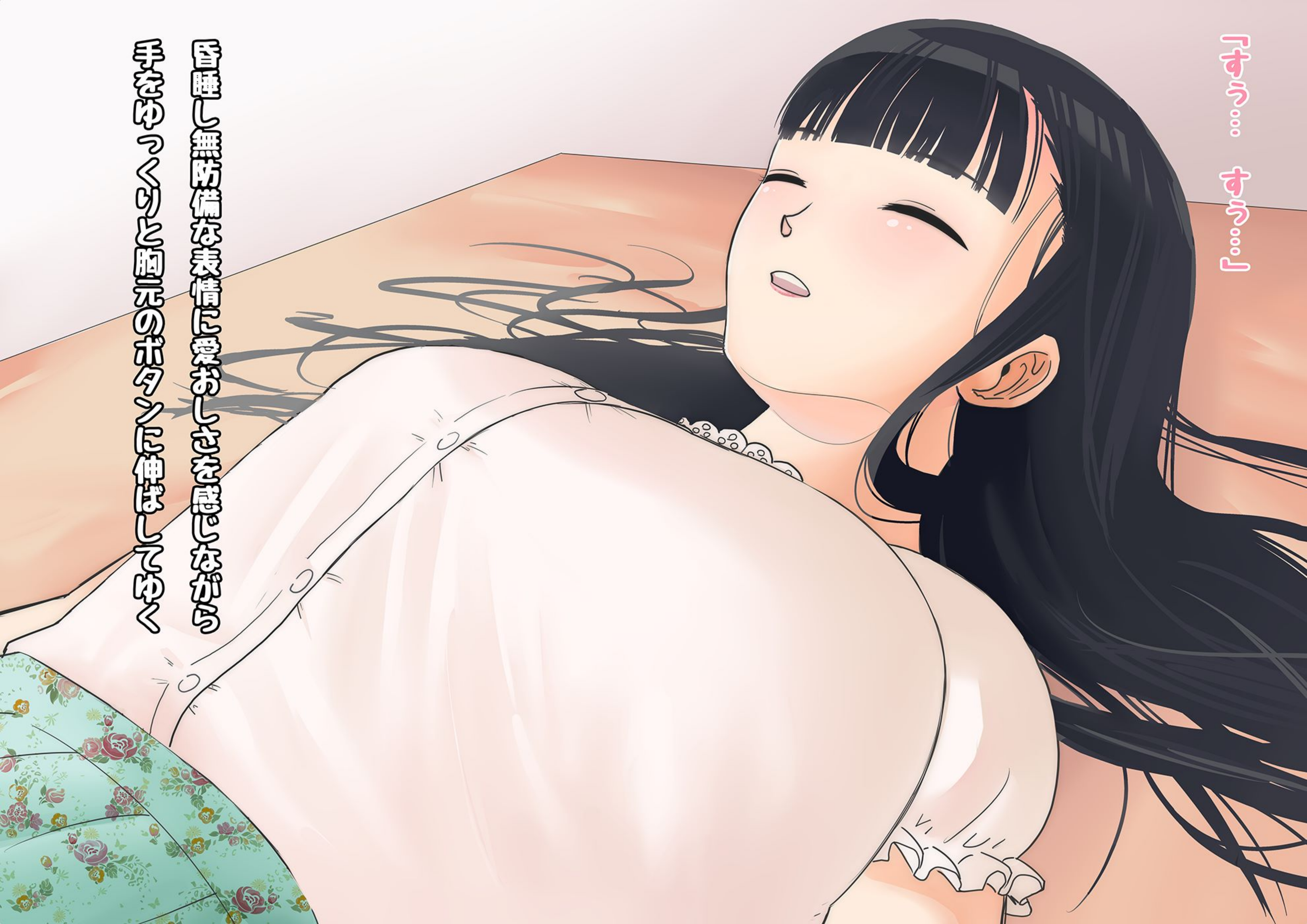
…直接おっぱいが見たい

自分の思考がそれしか考えられなくなっていく



「すん…すん…」

昏睡し無防備な表情に愛おしくおぼろげながら
手なでして、胸元のボタンを伸ばしてゆー





ぴちっ ぴちっ

ふじゅっ、服のボタンを外してんぞ

ふんぞりっ... ふんぞりっ...

わっ、ふたつとボタンが外れてんぞ

お胸の贅肉も回ってるぞ



ぽんぽん

ボタンを外して、服を脱げる

「ブラジャーだ…!」

菊井さんの下着…それだけでも興奮が収まらな
らなければ、手を体の後ろに回して彼女の下着を外す

ぴちっ



ムム ムム ムム

胸の高鳴りがとまらない

夢にまで見た、サークル内の男子

誰もが見たいと思っている

菊井さんの巨乳が僕の目の前であらわちなっている

…自然と胸に手が伸びてゆく

男を魅了してやまないその塊を手で包み込む
しっとりとしてきめ細かな肌が自分の指に吸い付いてくる
その感触の心地よさを、手が勝手に動き始める



菊井さんのおっぱいを寄せ上げる

重力で引っ張られ横へ広がっていた肉が中央へと集まる

軽く触れただけでは感じられなかった肉の反発や

乳首の少し違った弾力が感じられる



もっとおっぱいの感触を味わいたい僕は

強めに指を揉みこんでみる

「んっ…」

菊井さんは少し不快そうな声を出した

強く揉みしだいたおっぱいの感触とその声に

僕の興奮はより一層高まっていった






菊井さんのやわらかなおっぱいの
感触を堪能した僕は
薄らぐゴックの乳首に舌を伸ばす

レロッ

菊井さんの乳首は
とても滑らかな感触で
僕は夢中で舐め続けた



彼女の乳首を口にきんで
赤ん坊のように吸う
口の中で乳首が固くなっているのがわかる
朦朧とした意識の中でも
体が反応しているのだと思っても興奮した



興奮で爆発しそうなペニスを胸で挟み込む
菊井さんのおっぱいは少しひんやりとしていて
固く熱くなりすぎた僕のペニスには
そのギャップだけで射精してしまいそうな快感だった

ゴクゴクと震えるペニスを

彼女の胸に挟みながらすり付ける

菊井さんはそんなことは知る田もなく

無防備に体を晒している

その様はまるで、彼女を物扱いしているようで

たまらない背徳感が胸から湧いてきた



股間に快感が蓄積してくる

彼女のおっぱいを強く寄せ上げ

ペニスを埋没させ激しく腰を振る

すると徐々に快楽の波が押し寄せてくる



「んっ!!」

菊井さんのやわらかな胸の中に
おもいっきり射精した

サークルのどれだけの男がこの瞬間を夢見たのだろうか
優越感と征服感で心が満ちてゆく

エロクエド今までのどないほどの量の精子が流れ出た



ヌタアツ…

僕の精液が菊井さんのおっぱいの間で
下品に糸を引く

菊井さんは自分が愛玩具にされているなど
夢にも思っていない
目を閉じ眠る表情はその容姿と相まって
とても純粋なものに感じられ
それを汚すことに
僕はこれ以上ない快感を覚えていた



胸への愛撫を一通り終えたぼくの興味は
彼女の口へと移っていった

彼女の唇へ、へっ、ペニスを押して当てる

ペニスで触れる唇はとても柔らかかく

温気を帯びた唇は簡単に僕のペニスの吸い付いた



ぬはだに...

ペリスを少くして彼女の口くちをいぢるやう

「んっ...せっ...」

菊井さんは少く苦くするに表情を控える

しかし僕はお構いなしに奥く奥くとせしを推めてゆく



ぬぷんっ

菊井さんの口いっぱいには僕のペニスが挿入された

彼女の口の中はとてまあたかへ

無造作に動く舌が僕の亀頭を刺激してくる

僕は腰を動かし始めた

じゅぽん...じゅぽん...
...じゅぽん...
...じゅぽん...

下品な音を鳴らしながら彼女の口を犯してんぞ

柔らかな頬肉や舌に包まれながら

固い歯の程より刺激を受ける

その快感は他のいふやうな快感とちがう

徐々に腰を振るスピードが上がってんぞ

「はあ…はあ…」

ドクンッ！！

菊井さんの口内へ精液が流れ込んでゆく
射精して敏感になったペニスを
彼女の舌はフンダムに舐めてくれた

しばらく口内へと挿入したまま

心地の良い余韻を味わった

口からペニスをゆっくりと引き抜く
唾液と精液の混じった液体が
唇と亀頭の間を伝って

栓を失った口からは精液が無造作に流れだしていた





僕は彼女の下半身へと手を伸ばしてゆく

ふと見ると彼女の服は乱雑に剥かれ

されるがまま犯された姿がそこにはあった

普段の菊井さんの姿とは正反対の姿…

そんな光景にたまらなく充実した気持ちがかんみり上げてる

スカートをめくり上げる

菊井さんは当然なんの抵抗もしない



ついで菊井さんの「アム」が…僕の目の前だ…

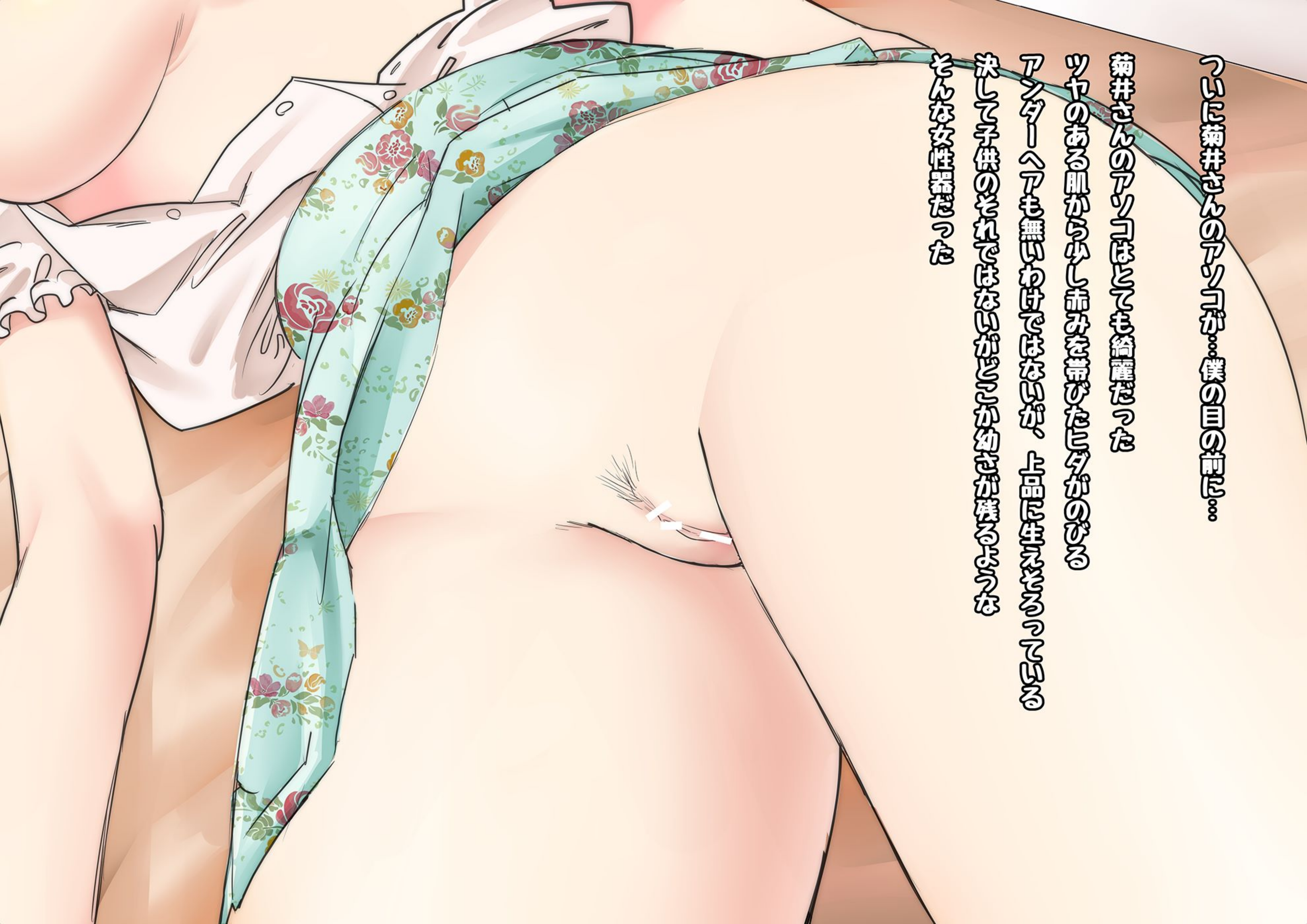
菊井さんの「アム」は…とても綺麗だった

リヤのある肌から…赤みを帯びた…トダがのびる

アンダーヘアも無いわけでは…だが、トダの生毛…

決して子供のそれでは…ないが…ぬれが…残る…

そんな女性器だった



ふとちもまを持ち上げ股を開ける

菊井さんは下品に股を広げる姿勢になる

絶対に人には見せたくない姿だろっ...

広がった股間からは彼女の「アソコ」がどよもよと見えた



僕は彼女の股間へ手を伸ばし
親指でその谷間をなぞり撫む

身体のだよの部分とも違う独特な感触がとても印象的だった



谷間の上で差し掛かったと瞬間で
クリトリスに指をかませる

ジュクジュク

やはり敏感な部分だからだろうか
菊井さんの体が少し反応する
僕はちょっとした菊井さんの反応を察しむちゅんっ
クリトリスを少しずつ刺激した



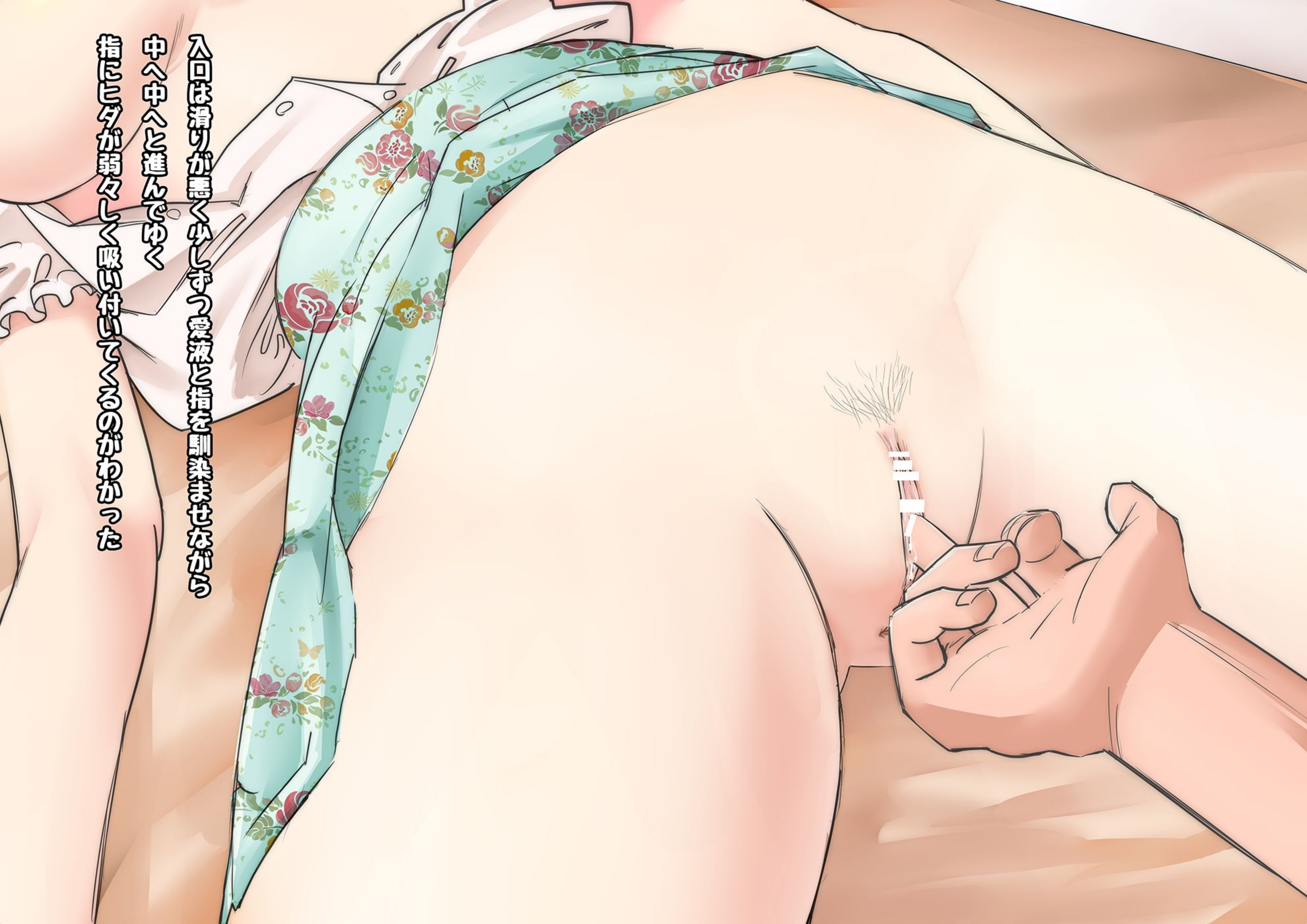
彼女のマンコからは透明な液体が
ずんずん垂れ落ちていた

僕は中指を谷間に馴染ませながらカニばねを
へらへら

おはよう

入口は滑りが悪く歩くと足が滑りやすくなるので注意しながら
中へ中へと進んでゆくと

指の力が弱くなると足が滑りやすくなるのがわかった



もう僕の股間ははち切れんばかりだった

彼女の尻から指を引けば抜くと
さらさら液体が糸を引いた

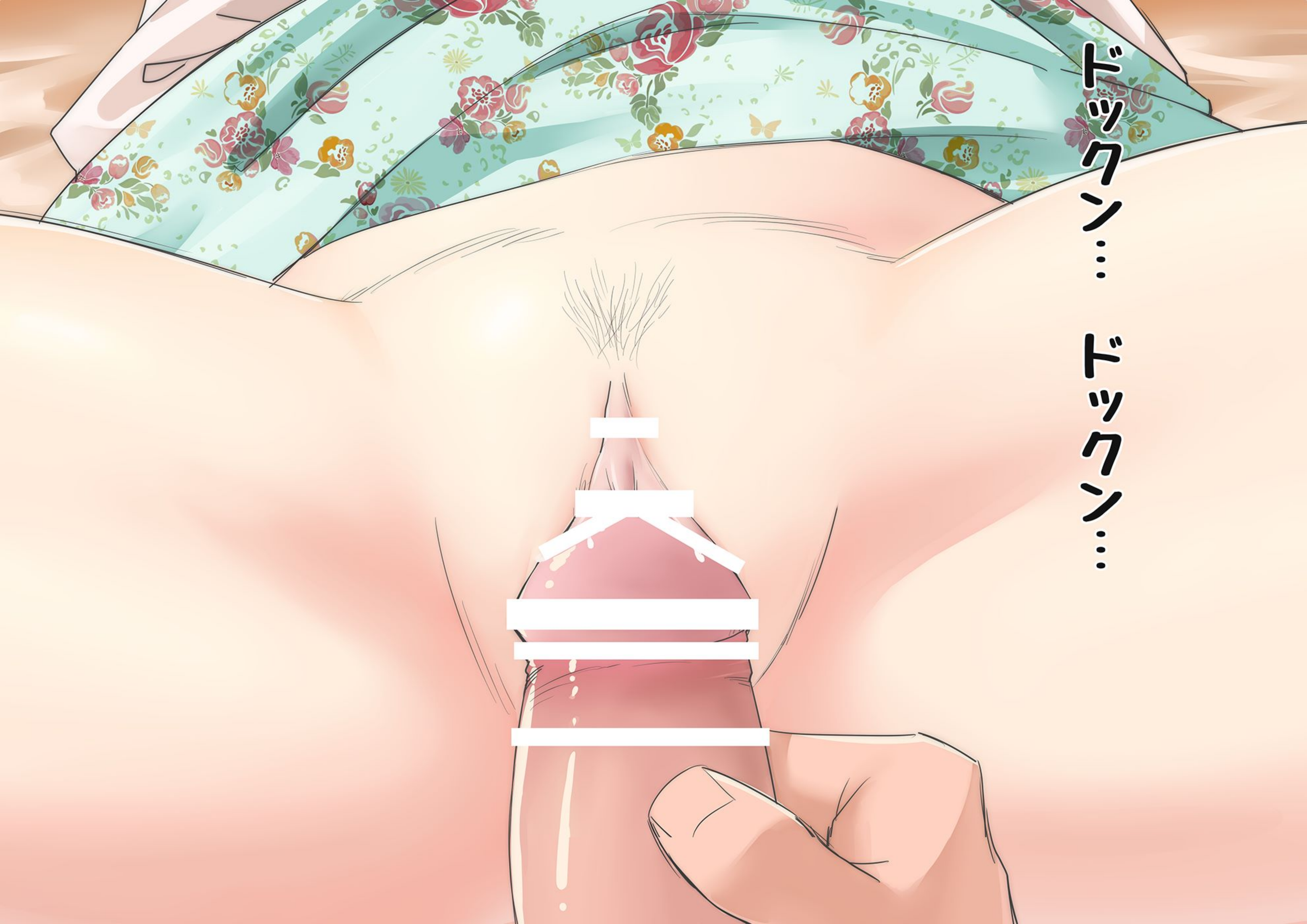


菊井さんの「マンフレッド」僕の「スミス」を押し当てる

柔らかいですし「弾力のある肉が裏筋を刺激する

マンフレッド・・・スミス・・・





ド
ク
ミ
ド
…
ド
ク
ミ
ド
…

ズブンッ...

は...挿入った...

あたたかい...すばく...

菊井さんの中は想像していたよりもずっとあたたかく

柔らかく僕のペニスを包み込んでいた



僕は菊井さんの中のアマリの気持ちよさを

腰を深く深くへかへ込めていく

「はッ…あッ…」

菊井さんは歯を少し噛み声を漏らしている

そんな表情と声に僕のペニスはより一層膨れ上がった



何もかもを抑えきれなくなった僕は腰を動かし始めた

「んっ…んう…はっ…」

菊井さんは変わらず苦しそうに声を漏らしている

その声を聴けば聞くほど腰を振るスピードが上がっていく

動きが大きくなるにつれ、彼女の体も揺れ始めた

その大きな胸が上下にゆさゆさと音を立てて揺れ、僕を興奮させた





菊井さんの体を突き上げるように
前に体重をかけ、腰を振る
彼女の中はかなりぬめりを帯びてきて
ペニスを滑らせることだ
なんの抵抗もない

僕が腰を振るのに合わせて、

菊井さんの頭ががくがくと揺れていた



菊井さんの巨乳を揉みし抱きながら
夢中で腰を振る

乱れた彼女の髪の毛が、

行為の激しさを自覚させる



彼女の両手首を掴み
自分の方へと引き寄せる
引かれた腕は大きな胸を
中央へと寄せ上げた



ズンツッ...ズンツョ...

彼女の腕を手組のようにつか

激しく腰を打ちつける

寄せ上げられた大きな胸は

円を描くように揺れ、

彼女の顔は力なく

反りあがっていった

腰を振るのに疲れた僕は

彼女を横回きに寝かせ

後ろから抱きつくようにまた挿入した

密着することので、彼女の体の体温と柔らかさを再確認する

ぴったりと触れ合ったふとももとお尻の感触が

僕になんともいえない安心感と快感を感じさせる



少し休憩した僕は

また腰を振り始める

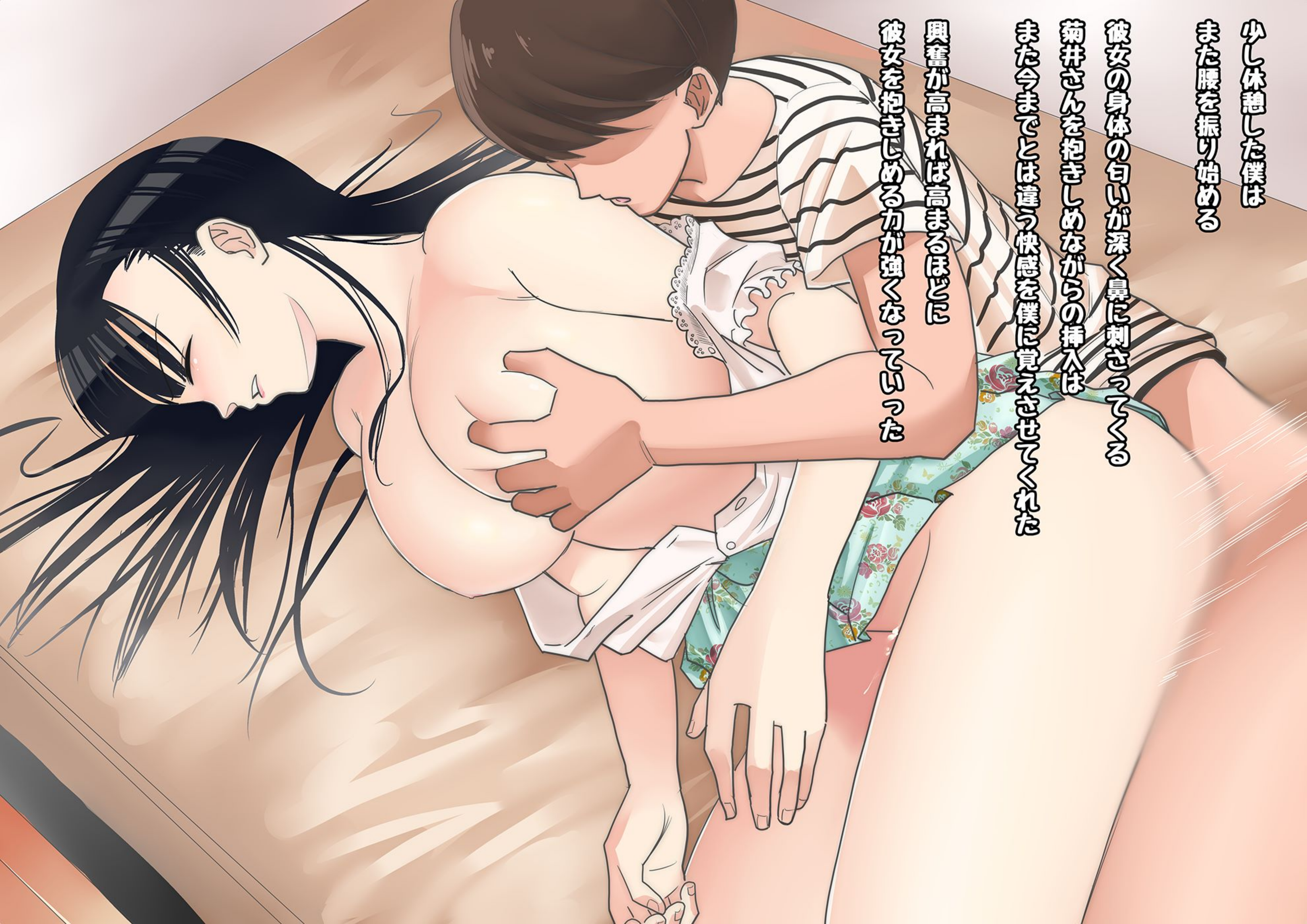
彼女の身体の白いが深く鼻に刺さってくる

菊井さんを抱きしめながらの挿入は

また今までとは違う快感を僕に覚えさせてくれた

興奮が高まれば高まるほど

彼女を抱きしめる力が強くなっていった



彼女をうつ伏せにし

後ろからペニスを挿入する

無防備に広がった尻肉から彼女の恥部が見える

普段あんなにも綺麗な彼女の汚い部分…

それを目に焼き付けながら僕はまた腰を振る



柔らかなお尻は腰を打ち付けるたび

心地のいい弾力でごちらを押し返してくる

夢中で腰を振りながら彼女を見下ろすと

そこには無抵抗に、ただされるがままに

犯される美少女の姿がそこにあった

これ以上ない上質な征服感で
心が満たされようとしていた



そんな気持ちが続いてくると同時に

今までの愛撫のすべてがフワフワシユシユバックする

この数時間で僕が彼女の全てを犯してきた

唇を奪い、彼女の身体を道具扱いし、

彼女を汚して犯しぬいた

そのすべてが今、背徳感とともに強烈な快感となって

僕の身体全体を駆け巡っている

この気持ちの中で果てたい

ぞんぞんぞんぞん同時に腰を激しく動かしていった



「はぁっ…はぁっ…はぁっ…」

今の感情のすべてをぶつけているみたいで、腰を振る

「んっ…うっ…はぁっ…」

菊井さんも動きの激しさに声を漏らしている

何も知らない、ただただ無防備な菊井さん…

そんな彼女がただただ愛おしく感じた

「はぁっ…はぁっ…はぁっ…」



ドク...ドク...

ドク...ドク...

ドク...ドク...

ドク...ドク...

ドク...ドク...

ドク...ドク...

Handwritten scribbles and a small white mark on the pubic area.

はあ…

はあ…

はあ…









「間もなく始発列車が到着します、黄色い線の内側です」

「んうう……えっ……あれ？」

「電車のホーム……？あれ？飲み会は……？」

「……嘘!?もしかして私酔い潰れちゃった!？」

「え……全然記憶ないや……ほんとに酔い潰れってあるんだ……」

「でもどうやって駅まで来たんだろう……」

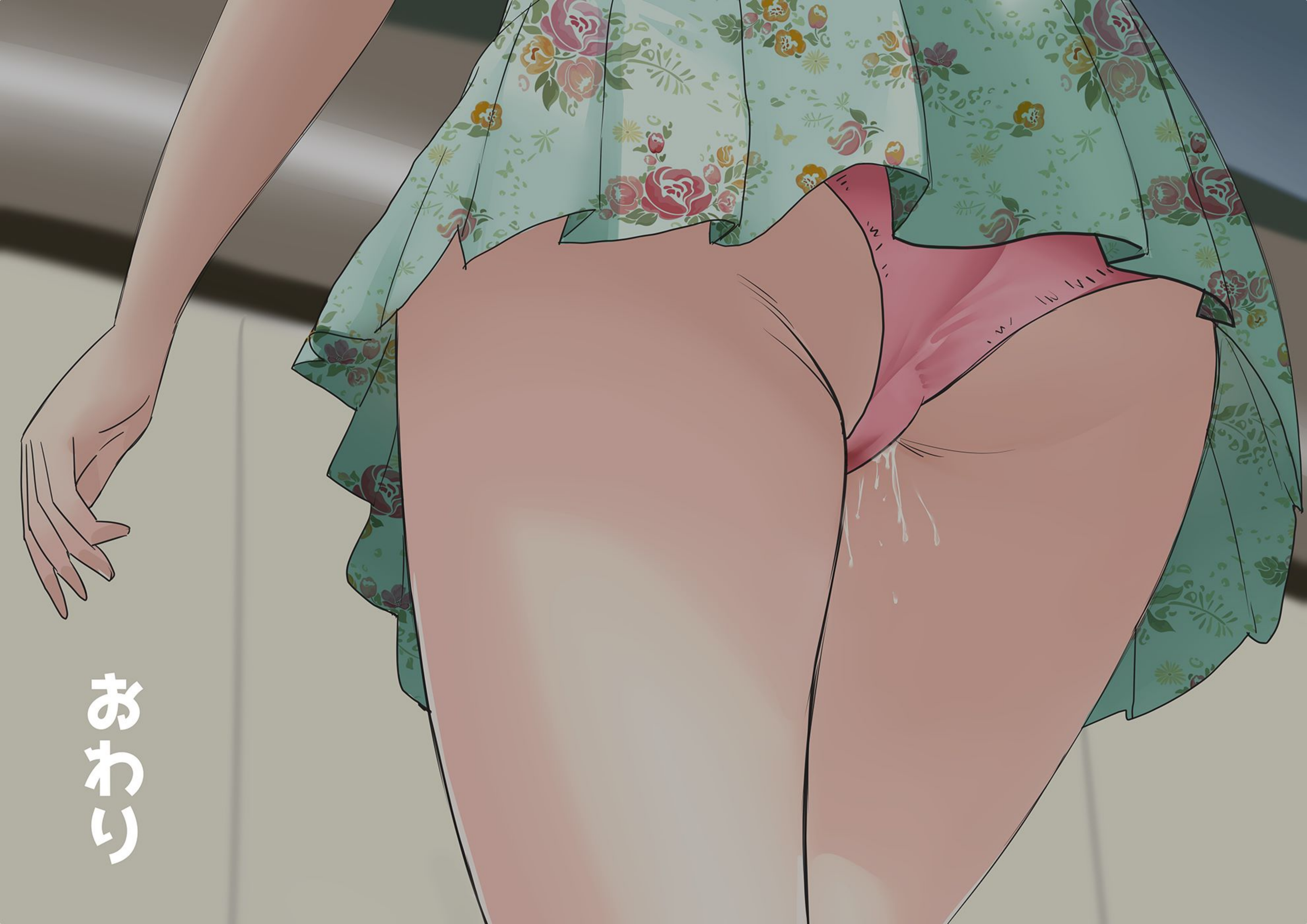
「帰ろうとはしたけどどこかで限界きちゃったのかな……」

「あ……頭痛いし……とりあえず家に帰らなきゃ……」





「ただ今到着の電車は、急に田舎なわけです。『乗車の際おっ』」
「うーん…なんかお腹がムズムズするなあ…」



あわり